



平成 31 年度/令和元年度

上宮学園中学校

上宮高等学校

学校評価

— 学校自己評価書 —

目 次

	(頁)
I 上宮学園中学校・上宮高等学校の教育理念	… 2
A 建学の精神 (mission)	
B 教育目標 (vision)	
II 学校評価のあり方	… 3
III 各分掌における評価項目と自己評価	
①教科	… 4
②学年	… 14
③コース	… 20
④進路指導	… 25
⑤教務	… 29
⑥生活指導	… 36
⑦入試対策	… 37
⑧保健管理	… 41
⑨教育相談	… 42
⑩データ処理	… 45
⑪生徒会	… 46
⑫人権教育	… 47
⑬図書・視聴覚教育	… 48
⑭広報戦略	… 49
⑮ I D	… 50
IV 総括	… 51

I 上宮学園中学校・上宮高等学校の教育理念

A 建学の精神 (mission)

本学園は浄土宗を母体とし、法然上人の仏教精神を教育理念の根底におき、知育・德育・体育のバランスのとれた全人教育を目標に「上宮教育」を推進し、実践する学校である。

校訓「正思明行」は、仏教の八正道における正思惟に由来し、中学生・高校生として生徒一人一人が、自らの思惟によって、児童期にありがちであった自己中心的な身勝手な考え方の誤りを明らかなものにし、正していくことによって自らを成長させ、青年として自信を持って主体的に行動することを説いている。また、学順「一、掃除・二、勤行・三、学問」とは、浄土宗の『住持訓』に倣うものであって、掃除とは文字通り身辺の環境美化を意図するとともに、学ぶ心の準備を意味する。勤行とは学業に専念し精進努力することの価値を説き、それは単なる成果主義の否定でもある。学問は授業そのものに止まらず、人として正しい生き方、つまり、人倫を学ぶことである。掃除と勤行を学問より先に掲げるのは、成績至上主義に陥ることへの戒めであり、学順はその重要性において並列の関係にある。

B 教育目標 (vision)

上宮学園中学校・上宮高等学校の教育目標は建学の精神に基づき、法然上人が説かれた人倫と仏の慈悲の精神を多くの若者に分け与えることである。

時代の波が変化しても、建学の精神をもって人間道の目的理想を見つめる正直の眼を育て、また、理想に向かって励み進む剛健の足を育てることが本校の使命である。

教育の三本柱は「知・徳・体」の育成であるが、「上宮教育」はこの三本柱のバランスを重視している。その中でも、知・体に偏らず、他校ではできない心の教育の実践を目標とする。それは知識・学力の向上だけではなく、総合的な人間力を向上させる教育である。長い人生の礎を築くことこそが学校本来の役割であり、上宮の本旨である。

II 上宮学園中学校・上宮高等学校の学校評価のあり方

2007年の改正学校教育法において、学校評価の実施・公表に関する規定が整備された。それには1年間の学校の取組を振り返り、自校のよさや特色、生徒の成長等を確認し、より一層の充実に向けて改善の方向を明確にするために実施することが記されている。また、評価結果を外部に公表し、保護者や地域の人々に生徒の成長・教職員の努力等を理解してもらい、学校への信頼を確かなものにしてもらうことが謳われている。

本校には「上宮学園中学校・上宮高等学校の基本理念と学校方針」があり、上宮教育の根となる「建学の精神」、茎となる「教育目標」、そして枝、葉となる「戦略・戦術」、「計画」が説かれている。上宮教育において、根と幹は揺るぎないものである。

各分掌・組織は「建学の精神」と「教育目標」を基礎としながら、有効な手段を用いて上宮教育を推進・発展させていく必要がある。そのため、年度毎に各分掌・各組織の現状を把握・認識し、自ら評価を下し、その反省の基に新たな課題と目標の設定を行わなければならない。この作業は本校の「戦略・戦術」の構築と実践であり、将来を見据えた「計画」のもとに行われるものである。それは上宮という木に光を当て、根や幹に栄養分を送るという重要な役割を果たすことになる。すなわち、枝振り（枝葉）はこの先に形を変えながらも、太く逞しい根や幹をもつ上宮という木を育てるのである。これが本校の学校方針である。したがって、本校にとって学校自己評価とは、「戦略・戦術」の構築・実践・改定を世に明らかにするものと捉えられる。

我々はこの作業において各分掌・組織のあり方を認識し、その中における自己の役割を認識する。それは教育職としてのスキルアップへと発展すべきものである。今後、我々は上宮のあるべき姿、すなわち未来を共通に認識することで、「個」の力を「組織」の力に変えていくのである。

III 各分掌における自己評価

①教科

平成31年度教科（国語科）

評価責任者名（金安克之）

分掌目標	国語力コースの目標に応じた入試に対応できる力だけではなく、生涯を通して生きる力の基礎となるものーの充実		
	重 点 課 題	評価	成 果 と 課 題
① 基本的国語力の充実を図る。 ・授業の厳正化を図る。	A	国語科の全教員が真摯に授業や教材研究に取り組むことができたと考える。	
① 学力推移調査・模擬試験の全体把握 ・結果分析と対応策の検討。	B	教科会でデーターの提示はできたが、ここの検討までは至らず、担当者任せになっている。	
② 教科会の活性化 ・情報の共有 → 定例化	A	定例の教科会は必ず実施した。その他、Classi の活用を試みたが全職員にタブレットが配布されておらず、十分なものとはいえない。	
③ 補講習の充実 ・全教員（専任・常勤・非常勤）が全学年で実施 ・コースの教育プランに基づいた（コースからの要請のあった）補講習が実施できるよう取り組む。	C	予定されていた補講習が実施できなかったとはいえない。クラブ活動との兼ね合いや非常勤講師の勤務時間など問題点は山積のままである。	
④ 日本語検定の対策と活用 ・生徒への広報の徹底 ・過去問に対して積極的な取り組みを促すことにより、合格率の向上を図る。	C	プレップ項目であるが、受験者数が多くったとはいえない状況である。周知徹底したい。	
⑤ 教育プランとシラバスの改訂 ・前年度作成した〈教育プラン〉と〈シラバス〉を、現状に合わせて改訂していく。	B	手直し程度しかできていない。新カリキュラムを念頭に置き、次年度の課題としたい。	

分掌名（社会科）評価責任者名（福本一高）

分掌目標	・コース別（受験形態別）指導の確立		
重 点 課 題	評 価	成 果 と 課 題	
① 学力推進プランの検討について ・現状分析（授業内容を含め） ・3カ年及び6カ年における コース別推進プランの検討 ・高大連携を踏まえたプランの検討 ・国立コースのカリキュラムの検討	A	各コースの特徴を考えた、計画をたて、それを実行できた。	
② 定期考查、模試の利用と活用について ・具体的な目標値の設定 ・分析と検討・対策 ・生徒指導への活用	B	科目ごとに検討したうえで、定期考查を実施した。	
③ シラバスの検討について ・学力推進に基づき、3カ年・6カ年 それぞれのシラバスについて授業を 展開しながら検討する	B	シラバスに沿って授業を展開できた。	
④ 教科会について ・教科会への全員参加 ・会議の定例化 ・教員間における情報の共有化 ・アクティブラーニング等の研修	B	(行事・主張等により)、教員の研修の場としての教科会を開けなかった。	
④ 補習・講習について ・各コースの特性を考えての実施 ・実施内容の検討 ・学年・コースを超えた講習の実施	A	各科目の特性にあった穂講習を実施できた。	

分掌名（ 数学科 ） 評価責任者名（ 池田竜司 ）

分掌目標	・コースに応じた学習プランを作り学習効果を挙げる		
重 点 課 題	評価	成 果 と 課 題	
⑤ 学力推進プランの作成について ・現状分析（授業内容を含め） ・3カ年及び6カ年における コース別推進プランの作成 ・高大連携を踏まえたプランの作成	C	本年度はプランの改定は行わなかった。	
⑥ 定期考査、模試の利用と活用について ・具体的な目標値の設定 ・分析と検討・対策 ・生徒指導への活用	B	定期考査、模擬試験とも各コースの担当者で具体的な目標を設定し、実施後に分析を行い、特別指導などがされた。	
⑦ シラバスの作成について ・学力推進に基づき、3カ年・6カ年 それぞれのシラバス作成	C	シラバスは以前に作成できているが、見直しが必要である。しかし、今年度は見直しができなかった。次年度は各担当者を中心に見直したい。	
④ 教科会について ・教科会への全員参加 ・会議の定例化 ・教員間における情報の共有化	B	教科会の実施を、事前に連絡を徹底したため、ほぼ全員参加された。 会議の定例化も十分できた。 教員間の情報の共有化は各学年のなかではあるがされていた。	
⑤ 補習・講習について ・全学年、各コースでの実施 ・実施内容の検討 ・学年・コースを超えた講習の実施	B	今年度より、補講習についての綿密な計画ができ、その計画のもと各コースで補講習が実施された。 特別補習も高校1年生を中心に毎考査ごとに実施された。 学年、コースを超えた講習は実施できなかった。	

分掌名(①教科 理科) 評価責任者名(教科主任 南 泰史)

分掌 目標	理科の教員間での情報の共有化をはかる。 授業の充実をはかる(実験も出来る限り取り入れる)。	重 点 課 題	評価	成 果 と 課 題
①教育プランの作成に向けて (作成にあたり配慮すべき事項)	・現状の問題点の把握 ・新学習指導要領「理数教育の充実」をはかる ・各コースの特色をいかす ・模擬試験等の活用を図ること ・生活適応力の養成を心掛けること ・教員の仕事の分担を配慮すること	B	現状の問題点、各コースの特色を活かす教育について検討できた。	
②シラバスの作成に向けて (作成にあたり配慮すべき事項)	・教育プランを基にすること ・授業担当者間で相談し、弾力的に運用する	B	授業進度・深度について、各学年・各科目担当者間での連絡は密にとり検討できているが、新型コロナウィルスによる臨時休校によってシラバス通りに実施できなかったコースもある。	
③模擬試験等の結果把握に向けて ・試験問題の結果等の分析と対応の検討		B	各担当者で実施している。	
④教科会・情報交換会の活性化に向けて ・各学年・各科目担当者間の連絡を密にする ・会議・打ち合わせ内容の徹底		A	定例的に教科会は実施した。	
⑤補講習の充実に向けて ・補講習実施を前提とした授業の配当 ・補講習内容の検討 ・補講習が効果的に実施できるシステム作り		B	7時間目の講習は、高3英数コース・パワーコースの物理・生物だけになってしまったので、本来の講習を充実させていきたい。	
⑥教員の教育力向上に向けて ・各種研修会への積極的参加		C	授業や担任業務のため、なかなか出張に出れないのが現状である。	
⑦授業の充実に向けて ・生徒の意識付け ・基礎学力の定着 ・応用 ・授業内容に最新科学情報の盛り込み		A	各科目で授業ノートをつくり、授業内容を統一するようにしている。また、デジタル教材の活用も盛んに行っている。	
⑧実験授業の充実に向けて ・実験設備の管理計画の立案		B	授業内容やコースにもよるが、積極的に取り組んでいる。	
⑨人権意識の涵養に向けて ・障害者等に対する配慮する(光、音、遺伝等)		A	授業時の表現には、細心の注意を払っている。	

分掌名（保健体育科）

評価責任者名（吉川 博士）

分掌目標	生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを継続するための資質や能力を育てるとともに体力の向上を図る。また規律ある態度を育てる。	
重点課題	評価	成果と課題
体育の授業内容を工夫し、充実させる研究を行う	B	2学期以降、体育館を使用してフィットネスを中心に、体つくり運動、バレーボール等、また教室でのビデオ授業とスポーツを楽しむ工夫をした授業がある程度、展開できた。
安全に留意し怪我、事故の無い授業をすすめる。	B	2学期以降は、限られた場所での、大人数の授業となり、いつもとは違う観点での事故に注意して進めることができた。
規律ある態度の育成と活気のある授業を目指す。自主的に授業に参加する態度を育てる	C	ある程度、授業の進め方を提示しないと自主的に動くことができない。自ら進んで授業に参加する工夫が必要。また、体育館までの距離が長く更衣を早くして授業に参加する事も徹底する必要があった。
体力の向上を重視し、健康や体力の状況に応じて体力を高め、生涯にわたりスポーツを楽しむ態度を育てる。	C	2学期以降、場所が限られていたので、運動量時間とも制限がされた。 そのなかでも、縄跳びやフィットネス等、普段の授業には無い種目でスポーツの楽しみ方が経験できた。
教員の資質向上 <input type="radio"/> 教材研究の徹底。 <input type="radio"/> 教科会の活性化 <input type="radio"/> 教員間の情報交換。 <input type="radio"/> 研究会・講習会への積極的参加。	C	新しい種目の実施で教材研究は進んで行えたが、研究会、講習会への参加等、教員の資質向上を目指す必要がある。

分掌名（ 英語科 ）

評価責任者名（ 鈴木 強志 ）

分掌目標	英語力向上の取り組みと実践教育。文科省発表 2020 年から実施される新テストや外部試験への取り組み等の情報収集、アクティブラーニングの模索	
重 点 課 題	評価	成 果 と 課 題
英語学力の向上 正しい発音の認識と音読指導 英語に対する興味付け 単語テスト・既習事項の確認テストの充実 宿題・課題・補習の充実 修学旅行の事前学習	C	○各担当者が授業において音声教材を使い、正しい発音の認識と音声指導を行った。 また小テストを通じ、単語や既習事項の確認を実施した。
資格試験の情報提供 実用英語検定の情報提供 第1回；1次筆記 6/3(日) 2次面接試験 7/1(日)・7/8(日) 第2回；1次筆記 10/7(日) 2次面接試験 11/4(日)・11/11(日) 第3回；2019年1次筆記 1/27(日) 2次面接 2/24(日)・3/3(日)	C	○G テック受検 4 技能版を 2 年生の国公立コース全員とプレップコース希望者および 3 年生の希望者にて実施し、Step Up ノートを早めに配布した。 ○多くの生徒が英語検定を受検し、そのための面接練習や講習も実施された。
大学入試「新しいテスト」の情報収集 高校 1 年の大学入試時より導入予定の「新テスト」や英語外部テストについての情報収集と英語科教員共有化	D	○「新テスト」の情報が徐々に明らかになってきたが、生徒・保護者に伝達する方法が確立できなかった。
アクティブラーニング導入への実施に向けて情報収集と研究授業等、実践報告の共有化	D	○各担当者がそれぞれに取り組もうと努力しているが、こなしていく内容と時間数との兼ね合いから、生徒に時間を与えることが難しいことも多く、手探り状態が続いている。
英語科教員間における情報共有化とその利用 教科内の授業担当者同士の情報共有・充実 共有化した情報の利用方法の検討	C	○共有フォルダの利用や、ほぼ月 1 度の教科会議を持つことで、教科内の対話や情報の共有化を実施した。

分掌名（ 芸術科 ）

評価責任者名（ 堀田泰彦 ）

分掌目標	個性豊かな表現と、鑑賞の能力を伸ばし、感性を高め、芸術の諸能力を伸ばし、豊かな情操を養う。	
重 点 課 題	評価	成 果 と 課 題
芸術を親しみそれを愛好する心情を伸ばすようにする	B	高校1年次の実施のため、基礎的内容から、それを活かした応用へ移ることが難しいので、工夫が必要である。
芸術への関心を高めるよう内容を構築する (生徒の制作意欲を高める工夫をする。)	B	生徒の創作意欲の湧くような内容を検討していく必要がある。
表現及び鑑賞の能力を高める指導の充実を図る	B	制作などに時間をほとんど費やすため、鑑賞の時間をつくる工夫が必要である。(1年間の実施のなかで、いろいろ対応しなければならないことが多く、難しさを感じる。)
教科会の活性化及び各学年コース・中高担当者同士の情報交換の活発化	B	情報交換は出来ていると思う。
各担当者の授業の実施方法について 教科内の連携を図る	A	各科目の担当者どうしでの連携は、概ねとれていると思う。
共学化により、指導上において男女生徒への指導の仕方に差が出ないよう注意する。	A	概ね出来ていると思われる。
その他 評価について	A	各教科にて共通の5段階の評価基準を設けることが出来た。

分掌名（ 情報科 ）

評価責任者名（ 池田 竜司 ）

分掌目標	授業で生徒のプレゼン能力の育成を図る指導をする。		
重 点 課 題	評価	成 果 と 課 題	
生徒のコンピュータのスキルが向上するように指導する。	B	<p>入学してくる生徒はスマートフォンなどのスキル、知識はあるが、コンピュータのスキルなどは不十分である。</p> <p>しかし、情報科の指導でスキル、知識とも向上している。</p>	
情報モラルの指導を徹底する。	B	<p>近年スマートフォンによるSNSなどの問題</p> <p>が多数発生し、情報モラルの指導は多くの時間をとって指導しているが、家庭での教育も必要であり、保護者への講習等も必要である。</p>	
生徒のプレゼン能力の育成を授業内で行う。	A	<p>授業でプレゼンをさせる機会をなるべく多く</p> <p>とり、生徒はプレゼンの経験をすることによって自己表現が豊かになった。班ごとに教員からコメントを手書きするなどきめ細かな指導</p> <p>が出来た。</p>	
詳細な年間指導計画を作成する。	B	<p>例年通り詳細な年間計画を立てることが出来た。</p>	
教科内の連携の強化を図る。	C	<p>個々の教員に制約があり、教科内で連携をとり、指導内容、授業進度などの打ち合わせを十分行うことが出来たとは言えない。</p> <p>今後は他教科との連携も必要であると考えて</p> <p>いる。</p>	

分掌目標	宗教の授業で「釈尊」や学校祖「法然上人」などの宗教的偉人の生涯とその思想を学び、宗教行事（合掌の姿勢・態度）を通じて宗教情操の涵養に努める。	
重 点 課 題	評価	成 果 と 課 題
1、各学年における授業内容の検討 ○ 授業の進め方の協議 ○ 授業内容及び進捗状況の連絡	B	授業の進め方：頻繁に協議する機会を持った。進捗状況：授業担当者同士が互いに把握は出来ていたが進歩はなっかた。
2、教材研究 ○ 参考資料の検討 ○ 教材プリントの作成 ○ 教授資料の共有	A	参考資料：担当者が各自工夫。 教材プリント：担当者が各自工夫。 資料の共有：学年及び単元によって共有する資料の数量は変わってくる。概ね良好。
3、宗教行事について ○ 宗教行事における事前指導 ○ 行事関係部署との連絡・協議	B	事前指導：関係部署の御協力で納得のいく指導が出来たように感じる。本校の宗教行事は他校より少ないが、行事数を増やすより、その質を上げて行きたい。
4、教科会の開催 ○ 月1回程度の定期的な開催 ○ 教科内での意見交換・情報交換	B	月1の教科会：理想的ではあるが、実際は困難である。情報交換：思っている以上に新鮮な情報を持っていることが多い。次回は意見・情報交換を活発に行いたい。
5、宗教教育と道徳教育 ○ 宗教教育と道徳教育についての研究 ○ 宗教教育と道徳教育の実践・推進についての検討	A	本校は宗教教育を行っているが、道徳教育の項目にも対応する必要がある。
6、老人福祉体験学習 ○ 実施施設との連絡・協議 ○ 学習内容の検討	A	施設との連絡・協議：実施施設と本校の関係は良くすべて遗漏なく実施できた。学習内容は実施施設のおかげで年々改良されている。
7、ボランティア活動への参加 ○ ボランティア情報の把握・収集 ○ 災害などの募金活動 ○ 寺院・地域への奉仕活動	C	ボランティア活動への参加は、ほとんど実施することができなかった。老人福祉体験学習をいかにボランティア活動に繋げるかが今後の課題として残っている。
8、宗教関係学校との情報交換 ○ 宗門関係学校との研究会 ○ 仏教関係学校との行事	A	宗門校：宗教情操教育研究会での意見交換も活発におこなっている。 仏教関係校：「花まつり」の行事を中心として関係学校と活発に情報交換ができている。

分掌名（技術・家庭科）

評価責任者名（結城 薫子）

分掌目標	生活に必要な基礎の知識を確立し、生活の自立が出来るように指導する。	
重 点 課 題	評 価	成 果 と 課 題
生徒がより理解できるように授業内容を検討する	B	生徒の理解レベルに合わせて授業内容を少し容易に変えたり、プリントなどを用意したりした。
教科内で情報共有、連帯強化出来るよう教科会の開催頻度を増やす	B	非常勤講師の先生の出勤日がそれぞれバラバラで全員で話し合いをする時間が持てなかつたので、連帯強化が図れなかつた。
教育プランやシラバスの改良	A	成人年齢が下がることを受け、文科省の通達に従い改良した。
教員の教育力向上に向けて研修会等への積極的な参加	C	分掌の仕事が多忙でなかなか研修会に参加できなかつたので、今後の課題としたい。
実習授業の取り入れに向けて受け入れ施設等の検討	B	新校舎の建設に伴い、実習室の整備と次年度の実習計画を行つた。

②学年

分掌名（高校3年）

評価責任者名（和氣 康弘）

分掌目標	関西大学合格者100名 生徒が本当に希望する高校卒業後の進路の実現（連携・指定校による進学率をできるだけ減らす）	
	重 点 課 題	評価
最後まで自分の夢をあきらめさせない	B	私立大学入学定員厳格化の影響があり、特に中堅校などの入試結果は厳しかった
HR等を活用しての、学習方法や学習計画の具体的な指導	A	おおむね達成できた
受け身に陥らない自律的な学習態度の育成	B	コースにより異なるが、プレップコースにおいてはどうしても安全志向が高まつた
授業と授業以外のメリハリをしっかりつける態度の育成（教員も時間厳守で授業に臨む）	B	遅刻者は多かった
きめ細やかな生徒への対応	C	一部保護者からの苦情もあったが、概ねきめ細やかにできた。

分掌名（高校2年）

評価責任者名（柴田 明洋）

分掌目標	建学の精神に基づき「知徳体」のバランスと「心」を教え育み 上宮教育の実現を目指す		
	重 点 課 題	評価	成 果 と 課 題
学年目標「生徒1人ひとりと向き合う」 ループリックの活用 挨拶の励行 母校愛の醸成 生徒の主体性	B		ループリックの活用があまりできなかった。
学校行事「積極的参加」 体育大会・大学見学・誕生会・例月の御忌 正当御忌・文化祭・修学旅行等	A		おおむね達成できた
学年会の活性「担任間の連携」 CLASSI の活用 担任会の開催 コース間の情報の共有	A		Classi の活用が充実した。
生活指導「基本的生活習慣の定着」 挨拶の徹底 遅刻者の減少 頭髪指導 生活指導部との連携	C		十分に達成できなかった。 遅刻者の減少については次年度も継続。
進路指導「進路学習の充実」 大学見学の充実 大学・学部の設定 新入試の対応 模試結果の分析 デジタルサービスの活用 e-ポートフォリオの活用	C		次年度の入試動向が2転3転し新入試の対応に追われた。 E-ポートフォリオの活用が十分出来なかつた。
学習指導「思考力・判断力・表現力の育成」 学習習慣の定着 成績下位の者への指導 補講習の充実	B		おおむね達成できた。
その他「家庭との連携と充実」 2者面談 3者面談 学級懇談会 保護者説明会	A		十分出来た。 次年度も継続。

分掌名（高校1年）

評価責任者名（仲谷 達幸）

分掌目標	生徒一人一人に向き合った「学習指導」・「進路指導」・「生活指導」の確立		
重 点 課 題	評価	成 果 と 課 題	
1 学年目標の設定 ・校訓の具体化 ・学順の実践 「教室の掃除の実践」 ・「時間を大切にする」	A	全体としては行き届いた。講堂での生徒の聞く態度はよかったです。掃除の道具に問題があると感じ。	
2 年間行事の実践 ・コース別行事の実践 ・生徒、保護者向け説明会の実施 ・学級懇談会の実施	A	説明会では問題がないが、やはりプレップ項目の理解ができていない。学級懇談会は実施している。	
3 学年運営及び学年会の活性化 ・担任間の連携 ・各コースの主任との連携 ・各分掌との連携	A	担任は、よくまとまっています。学年の先生とは行事の時だけで、連携はないです。	
4 補習・講習の充実 ・放課後講習の実施 ・期末考查後の補講習の実施	A	各コースとも担当者は問題なく取り組んでいます。	
5 生活指導について ・生活習慣の確立 ・配慮を要する生徒への積極的な関わり ・共通認識を持って指導に当たる ・情報メディアのモラルの教育推進	A	頭髪指導は、違反者の数が減りません。服装の違反に関しては少ない。SNSの事故は必ずあります。配慮を要する生徒は、よく連携されていて問題はない。	
6 進路指導 ・進路指導部との連携 ・2年次コース選択についての指導 文理選択 コース変更 ・LHRの活用	B	進路指導部との連携は問題ないと思います。文理選択は、看護の希望者が理系か文系かの問題がある。	
7 学習指導 ・学習習慣の確立 ・学力向上対策 ・模試の結果分析と活用	C	学習指導・学力向上が1番の問題です。各担任がよくやっていますが、各教科担当に任されている部分の比重が重い分、これらの課題です。	

分掌名（中学3年）

評価責任者名（辻 章夫）

分掌目標	<ul style="list-style-type: none"> • 基本的生活習慣の確立、および学校生活の充実。 • 保護者と学校の連携による学習習慣の定着と自学自習力の育成。 	
重 点 課 題	評 価	成 果 と 課 題
1. 6カ年教育プランに基づく中3学年目標の設定と実践	B	上記の目標を設定し、その実践に努めたが、学習習慣の定着の点ではこれからも一層の取り組みと注意喚起が必要である。
2. 基礎学力の定着に向けた、宿題・早朝テスト・補講習等の企画と運営	B	国語・数学・英語の早朝テストを曜日毎に振り分けて実施すると共に、補講習を実施していただいたが、そのフォローが不十分になってしまった。
3. 高校進学に向けた進学特別補習の企画と運営	A	各定期考査の結果をもとに、4期に分けて教科ごとに生徒を指名し、注意喚起と進学特別補習を実施し、基礎学力の定着に努めた。
4. 学年関連行事の調整・行事予定の作成、および企画と実施	A	修学旅行の事前学習と準備、9月末の修学旅行本隊の企画と実施、また2月の勉強合宿の企画と実施を学年団の先生方の協力のもとに実施することができた。
5. 学力推移調査の結果分析と、学習指導面へのフィードバック	B	学力推移調査対策としての過去問対策を行うと共に、本試験の結果分析会で生徒の現状把握を行った。一方、指導面へのフィードバックは不十分に終わった。
6. 学年の3クラス間における横の連携と、学年団全教員間での情報共有による学年運営	A	組担任・授業担当者から出てきた個々の生徒の現状を把握し、早期対応に活かすと共に、学年団での共有に努めた。
7. 学年と各分掌（生活指導部、進路指導、入試対策部、各教科）との連携、および情報の共有	B	各分掌の学年係りの先生を中心に、各部署と学年間の情報共有に努めた。学年に係りの先生がおられない部署については、連携が取りにくかった。
8. 保護者説明会、三者懇談、学級懇親会、授業参観、日々の連絡等を通した学校と保護者との密な連携	A	担任・副担任を中心に、電話や面談を通して保護者と密に連絡を取り合い、生徒個々の指導に活かせた。

分掌名（中学2年）

評価責任者名（檜 物 辰 治）

分掌目標	<ul style="list-style-type: none"> • 基本的生活習慣の確立、および基礎学力の定着。 • さまざまな学校行事を通して、自主性を養う。 	
重 点 課 題	評 価	成 果 と 課 題
1. 6カ年教育プランに基づく中2学年目標の設定と実践	B	結果としては、成長があったので実践できたと言える。
2. 基礎学力の定着に向けた、早朝テスト・補講習等の企画と運営	C	学年として、教員の不足もあり当初の計画とは大きく変わってしまった。
3. 家庭学習習慣、および自学自習力の定着	B	早朝テスト、スタディサプリなども使い家庭学習の習慣はある程度ついている。が、自学となるとなかなか意識が弱い。
4. 学年関連行事の調整、行事企画と実施	A	行事の運営は問題なく行えた。
5. 学力推移調査の結果分析と、学習指導面へのフィードバック	B	各担任により懇談等で活用してもらえた。
6. 学年の3クラス間における横の連携と、学年団全教員間での情報共有による学年運営	A	話し合いの時間は多く持てたので、連携はしっかりできた。
7. 学年と分掌（生活指導部、進路指導部、入試対策部、各教科）との連携、および情報の共有	B	特に生活指導部との連携は密にして生徒指導に役立てることができた。
8. 保護者説明会、三者懇談、日々の家庭連絡等を通した学校と保護者との密な連携	A	各担任中心となり保護者との連携がとれた。

分掌名（中学1年）

評価責任者名（水谷 善仁）

分掌目標	<ul style="list-style-type: none"> 学校生活の充実に向けた、基本的生活習慣および学習習慣の定着 保護者との連携による、生徒の自学自習力の育成 	
重 点 課 題	評 価	成 果 と 課 題
1. 安心できる学校生活の実践に向けた生徒指導の確立	C	生活全般の指導を行ってきたうえで、総合的に判断して、人間関係・授業態度など結果が伴っていない面が多かった。
2. 上宮学園中学校としての新たな取り組みの確立	A	保護者に中学校生活に対する思いを「子どもへの手紙」として依頼し、オリエンテーション合宿でサプライズ企画として実施した。生徒は保護者の思いを知ることで学校生活全般に良い影響があった。
3. 基礎学力の育成と定着に向けた、学習指導面への取り組み	B	日々の指導の中で学習指導に関しては力を入れた。結果、成長した面が多くあった。
4. 学力推移調査の結果分析と、学習指導面へのフィードバック	B	結果をしっかりと確認し、生徒の学習指導に役立たせることができた。
5. 校外学習、勉強合宿、スキー実習等の行事企画と運営	A	新しい行事（みかん狩りなど）を取り入れ、充実した行事企画と運営が行えた。
6. 学年のクラス間における横の連携、および情報の共有による学年運営	A	情報の共有の為に学年会を開き、クラス間のまとまり、ルール作りなどがしっかりとできた。
7. 学年と各部署（生活指導、進路指導、入試対策、各教科）との連携、および情報の共有	A	各部署との連携によって生徒への指導も良いものとなった。
8. 保護者説明会、三者懇談、授業参観、学級懇親会、毎月発行の学年通信を通して学校と保護者との密な連携	C	担任先生を中心に保護者と綿密に連絡を取り合った。しかし、学年として保護者に対して不信感をもたれてしまった。

③コース

分掌名（ 6 カ年・特進 ）

評価責任者名（ 池田 竜司 ）

分掌目標	中高 6 年間を通じて生徒が将来の自己像を描きつつ、自律的学習者となれるよう学習と生活の指導を行う。各学年の学力向上策の促進、提案を行う。		
重 点 課 題	評 価	成 果 と 課 題	
コース再編 平成 31 年度の特進コースとパワーコースの合体に向けて、行事等の見直しを行う。	B	京都大学、大阪大学見学会等、パワーコースと合同で行事を組むことができ、次年度以降も継続して合同で行う予定である。	
六ヵ年での補講習プランの検討 中 1 から高 3 まで 6 カ年での補講習プランをシステム化。特に高校の通年補講習において他コースとの連携・協力を図る。	A	補講習の計画が完成し、すべての教科において綿密な補講習が実施された。各考査での特別指導も実施され、成績不振の生徒が減少した。	
行事・企画 学校の行事と 6 カ年一貫コースの行事の精査・改善を行う。	C	今年度は行事の変更は特に変わなかった。	
キャリア教育 中学では体験的なキャリア教育の企画を行う。高校でも体験的なキャリア教育と社会人の講演等の企画を行う。	C	ECC 国際外語学院でのグローバル体験プログラムで体験的なキャリア教育は出来たが、探究学習の時間でのキャリア教育が出来なかつた。	
大学入試改革・「新テスト」の情報収集と対策 大学入試改革・「新テスト」に対応する為の情報収集と対策を協議する。	B	共通テストの情報は収集できたが、文部科学省の制度変更が多く、共通テスト対策は充分に出来なかつた。	
各学年の学力向上策の促進、提案 各学年・各コースにおける学力向上策の協議を行う。	A	六ヶ年会議等を行い、学力向上に向けての 対策を」行った。第 2 回スタディーサポート の結果でも学習時間は増加している。	
生徒満足度の向上 生徒満足度が学校全体に比べてやや低い原因を分析、向上策の協議を行う。	B	今年度のスタディーサポートの結果などから分析すると、満足度は低くなかった。今後も満足度が高くなるような指導が必要である。	
I C T 教育 中学ではスタディーアプリ、コロコロイングリッシュ、高校では Classi の利用を推進する。	A	中学でのスタディーアプリ、コロコロイングリッシュ、高校での Classi の利用は十分活用出来ていた。次年度はさらに学習機能の活用をした。	
生活指導 挨拶、頭髪、遅刻等の指導を学年の指導として行い、社会の一員としてのマナー教育を推進する。	B	六ヶ年の生徒は挨拶、頭髪等よく出来ていた。学年で講堂に集まる時などもマナーもよかつた。授業態度については指導される生徒もいるので、授業態度については指導が必要である。	

分掌目標	○生徒の現状に即した連携・指定校推薦のシステムの企画運営。 ○学力を中心とした生徒の総合力を伸ばすための具体的施策を行う。 ○推薦入試にとらわれない新しいプレップコースのあり方を考える。	
重 点 課 題	評価	成 果 と 課 題
連携・指定校推薦入試枠にとらわれない新しいプレップコースのあり方について研究する	B	学年での目標に合わせた方向性を模索できた
生徒の現状に即したパスポート項目および基準の検討	B	出席日数やクラブ活動での見直しが議論に上がっている
生徒の現状に即した連携・指定校制推薦入試の最終選考方法の検討を継続する	C	検討はしていない
プレップ科の授業内容の工夫。とりわけ高3の2学期と高2の3学期のカリキュラムに新しい工夫を導入する	C	新しい工夫はできていない
大学見学会の企画・運営	A	例年通り、充実した内容で実施できた
連携大学との良好な関係維持のための新たな工夫。未来型の連携の形を研究する	B	新しい提言が大学側からもなされている
生徒に対するプレップの内容の周知・徹底 3年間のビジョンを明確にさせる	A	1年での説明会のほか、プレップ会議や生徒個々の疑問に答えることができている
教員に対するプレップの内容の周知・徹底	A	各学年プレップ会議において、機会があるごとに確認している
プレップコース生徒の具体的学力増進策を講じ、成果につなげる	B	模試においてデジタルサービスの活用を提言している
家庭学習・自主学習できる生徒にするための具体的方策を講じる	C	方策は講じられていない
学校全体に対して、プレップコースを理解してもらうための適切な情報発信を定期的に行う	C	情報発信はできていない

分掌名(英 数) 評価責任者名(杉本智也)

分掌目標	各学年の生徒に応じた学習指導を実施する。 国公立大学への合格者をふやす。	
重 点 課 題	評 価	成 果 と 課 題
学力向上、および国公立大学合格にむけての指導の徹底	A	国公立大学の現役合格者は 14 人であった。現三年生は早くから私学にシフトした生徒が多かったように思われる。昨年度も書いたが、国公立コースとして最後まで国公立大学を目指すように引っ張るべきか悩むところである。
放課後、長期休暇前の講習の充実	A	放課後および長期休暇前に各学年で講習を立案し、効果的に実施できた。
模擬試験の分析 生徒個々にまちがった箇所を確認させる	C	模試をもっと分析し、活用したほうがよかつたのではないか。
大阪市立大学見学会の実施		大学側が大学見学会を実施していなかった。
二年次からのコース選択（1年）	A	各生徒のコース選択を生徒、保護者とともに考えた。
個人面談の充実	A	各学年とも面談を充実させ、生徒個人の把握に努めることができた。
情報の共有化	B	パワー、特進も含めた国公立コースの会議で各コースの情報は共有できたように思う。

分掌名(パワーコース)

評価責任者名(西村 浩一)

分掌目標	東京大学・京都大学・大阪大学・神戸大学などの難関国立大学への進学		
重 点 課 題	評価	成 果 と 課 題	
2019 年度から手掛ける新カリキュラムの作成については、新入試の動向を配慮しながら台頭する。 (5 中期的目標 b 教育環境と組織運営(3)) 中高新学習指導要領に基づくカリキュラムの立案を行い、教育プランとシラバスにも反映する。特に「探究活動」については教科を超えての検討と決定を行う。 (6 今年度の目標 b 学校の教育環境と組織運営(3))	D	今年度はカリキュラム案を出せず。 来年度早々にも案を提示したい。	
国公立会議およびコース主任と管理職による会議を重ね、各コースにおける諸問題を解決して、教育環境のソフト面を改善する。 (5 中期的目標 b 教育環境と組織運営(5))	A	国公立会議を毎週土曜日に開催することができた。教育環境のソフト面を ICT とアクティブラーニングと捉えると本年度は 2 学期より新校舎で電子黒板が設置され、クラッシャーを活用できた 来年度も継続して、クラッシャーを活用した指導を行う予定である。	
進路指導 LHR のあり方を見直し、各学年・各コースの教育プランやシラバスに反映させる。 (5 中期的目標 b 教育環境と組織運営(9))	B	高 1 では勉強法指導会で独自性を出している。 高 2 ・ 3 での進路指導 LHR のあり方を見直す検討をすべき。	
パワーコース専願者の志望者を増加させる方法を検討する。 (5 中期的目標 b 教育環境と組織運営(11) V ④)	B	専願 受験 合格 R02 41 14 1 クラス H31 43 13 1 クラス H30 24 9 1 クラス H29 43 10 1 クラス H28 40 16 1 クラス H27 49 11 1 クラス H26 30 16 2 クラス 昨年度に比べて受験者-2 合格者+1 という結果になった	
新しい入試方法を検討する。 (5 中期的目標 b 教育環境と組織運営(11) V ⑥)	D	コース会議・国公立会議で検討できなかつた。	
進研模試の平均偏差値が、1 学期から 3 学期にかけて 1 ~ 2 ポイントアップするような方策の立案に着手する。 (5 中期的目標 c 生徒の学力・進学面の目標 (2))	B	1 学期 → 3 学期 高 1 55.5(進研 7 月) → 58.3(進研 1 月) 高 2 55.4(進研 7 月) → 57.7(進研 2 月マーク) 高 3 53.3(進研 6 月マーク) → 52.6(進研 9 月マーク) 偏差値の維持で精一杯である。 進研模試の平均偏差値が、1 学期から 3 学期にかけて 1 ~ 2 ポイントアップすることで最終目標を達成に近づくとは考えられない。 学校目標を再考すべきである。	

			2 28	31	30	29
	D	A	B	B	A	B
3年後には国公立型コースから、東京・京都・大阪・神戸大学に合計5名以上、大阪市立・大阪府立大学に合計10名以上、また、国公立大学合格者合計50名以上の合格者を継続に維持できるような指導体制を作る。 (5中期的目標c生徒の学力・進学面の目標(3))					現浪現浪現浪現浪 東京00000000 京都00000000 大阪00001000 神戸01100001 市立10002010 府立0040002 国立8421011246 管理職が主導して指導体制を作成していただきたい。もしくは学校目標を再考するべきである。	
定期考査に対してしっかりと計画を立てて勉強する姿勢を身につけさせる。 (5中期的目標c生徒の学力・進学面の目標(5))					各担任がホームルームや面談を通して、細かに声掛けができる。	
国公立会議とコース主任会議を継続し、情報共有と進学実績の向上の具体的方策を検討し、できるところから実行する。 I 学年進行時の生徒のコース変更について、情報共有を進める。特に2020年度の特進コースとパワーコースの合体に向けての取り組みを行う。 II 各コースの取り組みの中で一緒に行える事柄について協力しあって学習効果を上げる。 (6今年度の目標b学校の教育環境と組織運営(5))					国公立会議を毎週土曜日に開催することができた。 I ルール整備はできているが、生徒に関する情報は、国公立会議に上がってこないので不十分である。 II 担任教科担当がパワーと特進を掛け持ちすることで生徒に関する情報共有が進んだ。 来年度の課題は <ul style="list-style-type: none">・コース変更をする生徒の情報共有・高2における教科の進度・教材・行事を合わせること	
進路指導部と各コースが緊密に連携して情報共有をスムーズに行い、一本化できる教育活動を協力して行う (6今年度の目標b学校の教育環境と組織運営(18))	D				今年度、大学合格者のデータや模擬試験のデータの提供は一切なかった。緊密に連携しているとは言い難い。 進路指導部の持っているデータを、逐次コースに提供していただきたい。	
模擬試験・スタディサポートについては、職員会議、コース会議、教科会議での実効性のある分析を促進し、教科指導、進路指導に十分反映できるようにする。 (6今年度の目標c学力・進学面の目標(1))	D				進路からデータがでず、有効な分析ができなかつた。 進路指導部の持っているデータを、逐次コースに提供していただきたい。	
高度なテキストを使用する。 (2020年度入試説明会より)	A				他コースとは違う教科書・副教材を使用し、各教科担当者が工夫をして、日々の授業を進めている。勉学旅行事前学習でも関連教材を用いて指導している。 今後も継続して取り組んでいきたい。	
自立した学習者を育成する。 (2020年度入試説明会より)	B				各学年とも希望制講習を実施。コース独自の進路学習を通じて意識を高めている。 クラッキーを活用して、自立した学習者の育成を目指す。	

④進路

分掌名（進路指導部）

評価責任者名（畠中 広） 2020.3.21

分掌目標	大学入試改革に対応した進路指導を実践し、一人ひとりの進路実現をサポートすると共に、厳しいと言われる私学入試に対して安易に志望校を下げない高い意識づくりを推進する。	
重点課題	評価	成果と課題
高2生徒の2020年度大学入試に向けて、各方面からの最新の動向の情報収集に努め、対策を講じる。特に「大学入学共通テスト」「英語外部検定試験」「e-portfolio」「新しい調査書」について注視する。	A	大学入試改革最新情報に注目し、生徒への情報提供も的確に行えた。しかしその後の文科省の突然の方針転換と状況変化に翻弄された。「英語成績提供システム」の活用および「共通テスト」における国語・数学の記述設問も導入見送り、「Jep」の大学の活用も進まず。
プレップ・一貫プレップコースにおいて、プレップ項目の見直しをすすめる。また指定校制推薦入試のみに頼らない進学指導を進める。私立大学の入学定員厳格化を踏まえた進路指導について企画・提言を行う。	B	主任の主導で、高校3学年全体でプレップ項目の見直しを進めた。令和2年度入学生から、学力面での評価を重視し資格検定での評価を抑制する方向に決まった。私立大学入試の難化が2016年度以来ピークとなり、成績下位生徒の進学指導が最も難しい年度であった。次年度の指導方法に検討が必要である。
国公立大学の合格者を増やす施策を考え実行する。とりわけ、推薦入試・AO入試での受験を推進すると同時に、その指導を学校として支える仕組みを作る。	B	次年度から本格化する大学入試改革を見据えて、最新情報の提供を心掛けた。国公立大学のAO・推薦入試受験者の増加を背景として、次年度から「Z会オーダー講座」で「小論文対策講座」「志望理由書対策講座」を導入することが決まった。
看護・医療系進学希望者に対する情報提供を促進する。	B	今年度からClassiを活用して、該当生徒に迅速に情報提供することができた。
効果的な「分析会」の定期的開催と企画会・教科会・学年会で検討材料となる資料提供を推進する。主な分析対象は「スタディーサポート」および「模擬試験」。それを受けた学力増進策なども提案してゆく。	C	主任の主導でベネッセのデジタルコンテンツの活用を推進した。5月の「スタディーサポート分析会」は定例化できたが、「模擬試験」の分析会およびそれを受けた学力増進策の提案ができていない。積年の課題であるが、次年度の重点目標として実現を推進しなければならない。
「Uゼミ」のあり方を常に検討し、生徒ニーズに合った最新の講座になるよう工夫する。また今後受講者の増加が予想される「英検対策講座」「オンライン英会話」を充実させる。	B	中学3年生対象「高校進学準備講座」を習熟度別の少人数制で新規開校した。卒業生が指導する新しい取り組みであるが、受講生側の意識が低く後半は生徒が集まらなかった。また高2・高3の受講者が少なくなっており、それを含めて次年度から抜本的な検討が必要である。
生徒や保護者対象「進路説明会」を洗練させ、生徒のやる気に更に働きかける。チーム制を導入するなど、複数の視点でコンテンツを充実させる。IT機器を導入し、わかりやすく質の高い進路説明会を創造する。	A	チーム制は導入できなかつたが、「大学入試改革」に関わる最新情報や、大学入試の現状については、必要な時期にポイントをわかりやすく伝えられたと思う。今の生徒に相応しく、更に洗練された質の高い説明会を作り上げたい。
ベネッセ・河合塾等の主催する入試等分析会へ積極的に参加し、必要な情報・資料を収集し、教職員・生徒・保護者に提供する。また、教職員に対して分析会等への参加を促す。	B	例年通り積極的に情報の収集と提供に努めた。次年度はとりわけ新任の担任の先生中心に、分析会等へ参加して進路知識・スキルをあげて頂くような仕組みを作る必要性を思う。

大阪府私立高等学校進路指導研究会の役員校となったので、その運営に協力するとともに、他校の先生から情報収集に努める。	A	役員任期2年の1年が過ぎた。次年度は会計の仕事が本格化する。教育改革の最新情報を得やすく、他校の先生からも情報を得られるので大変有意義であった。
---	---	--

分掌名（ 進路指導部 進路指導係 ）

評価責任者名（ 石川 泰久 ）

分掌目標	生徒が自分の将来に夢や希望を抱き、自分の意思で主体的に進路を選択する能力を育成する。また希望の進路に進めるよう、模擬試験の結果活用や補講習・講座などの充実を図り、学力向上をサポートする。	
重 点 課 題	評価	成 果 と 課 題
中学学力推移調査 ・年2回実施の準備・実施 ・データの活用 ・分析会の設定	B	問題なく実施できた
進路LHRの内容の見直し ・各学年・学期の実施の内容の検討	B	十分な検討はできなかった
高1校内模試 ・校内模試（年3回）の準備・実施 ・データの活用 ・分析会の設定	B	
高2校内模試 ・校内模試（年3回）の準備・実施 ・データの活用 ・分析会の設定	B	
高3校内模試 ・校内模試（年5回）の準備・実施 ・データの活用 ・分析会の設定	B	実施はできたが、実施時期・内容についてはさらに検討が必要
スタディーサポート ・高1高2、年2回の実施 ・事前学習教材の準備と活用の案内 ・データの活用 ・分析会・結果活用勉強会の設定	B	
R-CAP ・高1、年1回の実施 ・データの活用		実施せず
外部模試 ・案内と取りまとめ ・データの活用	B	問題なく実施できた
進研模試デジタルサービス ・生徒・教員の活用促進	B	十分に活用できていない

分掌名（ 進路指導部 進路企画係 ）

評価責任者名（ 三吉 宏和 ）

分掌目標	○生徒がよりよい進路選択を行うための、情報収集や学力向上のためのサポートを行う。	
重点課題	評価	成果と課題
高2生徒対象進路説明会（5月：進路指導資料等を用いた説明）において進学意識を高める。	B	問題なく実施できたが、新たな試みまでは至らなかった。
高3生徒対象進路説明会（5月：進路指導資料等を用いた説明）において進学意識を高める。	B	問題なく実施できたが、新たな試みまでは至らなかった。
高2学年保護者対象進路説明会（5月）で保護者に進学意識を高める。	B	問題なく実施できたが、新たな試みまでは至らなかった。
高3学年保護者対象進路説明会（5月）で保護者に進学意識を高める。	B	問題なく実施できたが、新たな試みまでは至らなかった。
高1生徒対象進路説明会（9月：進路指導資料等を用いた説明）において文系・理系の選択をしっかりと考えさせる。	B	問題なく実施できたが、新たな試みまでは至らなかった。
高1学年保護者対象進路説明会（9月）で保護者に進学意識を高める。	B	問題なく実施できたが、新たな試みまでは至らなかった。
懇談で使いやすい進路指導資料を提供する。	B	新たな資料の制作を試みた。
連携・指定校制推薦選考委員会で役割を果たす。	B	問題なく役割を果たせた。
受験大学報告シートを用いた合否状況管理システムの検討及び構築。	B	出来る範囲で早く受験状況を把握できるようシス템の再構築を行ったが問題点もあった。
日々郵送されて来る。郵便物を管理し、生徒の進路指導資料の閲覧環境を整備する。	B	問題なく実施できた。
模試の結果を分析し、わかりやすい資料を作成する。	C	新たな資料の制作があまりできなかつた。
大学入試センター試験等入試における。補助・管理をする。	B	問題なく実施できた。

⑤教務

分掌名（高校 教務部）

評価責任者名（西岡 信敬）

分掌目標	学校業務の円滑な運営に寄与しつつ、行事内容の改善、業務内容の改善を計る。		
重点課題	評価	成果と課題	
I 部長			
①教務に関する事項についての連絡調整及び指導助言	A	1年間、教務部長を経験する事で一昨年よりもスムーズに連絡調整ができたと思う。指導助言に対しても、行事予定から逆算して、「いつ・何をしてもらいたいか」を明確にできたと思われる。	
②教務部会の招集	A	企画会等の議案を教務会におろすため、ほぼ毎回開催し、係の先生からの意見聴衆を行い共通認識が持てた。	
③校務に関する改善案の提言	A	新校舎に移り、今後の改善につながる新校舎で必要な立案ができた。	
④入学試験の準備・運営	A	新校舎初の入試に関して、一部新しい取り組みなど、滞りなく準備・実施できたと思う。	
⑤教育計画の実施に際しての調整、指導助言	B	調整できた部分はあるが助言には至らなかつたところがある。来年度の課題である。	
II 行事企画運営係			
①行事について情報収集・検討・集約	B	もう少し情報を集め検討する必要があった。	
②各行事の企画・運営	B	既存の行事を熟すことばかりで、まだまだ行事 자체を精査する必要がある。	
③各行事についての保護者連絡	A	保護者連絡は、プリントを通じてだが出来たと思う。	
III 修学旅行係			
④各種情報収集・検討	A	宿泊地変更など、事前の検討事項は比較的スムーズにできた。	
⑤高2学年団への情報伝達・指示	B	業者・学年との情報交換のタイムラグがあり、少し混乱した部分があった。	

⑥高2保護者への内容説明	A	説明会・質問会・プリントなどを通じてできたと思う。
⑦現地での交渉・各種準備	A	病人を含めた突発的な事象に対しても対応。
⑧次年度に向けての検討	C	次のドイツに関しては事前の情報が無く、係として検討はしていない。

IV 時間割係		
①新年度時間割作成 授業内容・選択科目・教員の都合等の制限項目 が時間割作成に困難さをもたらしている。制限項目の減少に向けて提言を行う。	B	新校舎への引っ越しを前提として、『選択教室の移動回数を減らした時間割を作成できた。各先生方の制限項目については例年通りだった。
②通常時間割変更 『補欠は罪、振替えは義務』をスローガンに 自習授業の撲滅に向けて提言を行う。	B	出張等で授業ができない場合は、事前に振替えをしておくことが定着している。 Classi を使用した変更連絡については、いくつかのミスが見られた。
③定期考查時間割作成 教科間に不公平感が出ないように努める。	B	年間を通してバランスよく作成することに努めたが、担当教員の都合や、教科の組み合わせにより偏った時間割になった教科・科目ができてしまった。
④考查監督作成 教員間に不公平感が出ないように努める。 監督の交代は教員間の個人的やりとりで解決する 仕組みが浸透してきたため、円滑に遂行できている。	A	監督に行く回数についてクラス間の差が出ないように組むことができた。

<p>⑤ 考査問題管理・授受</p> <p>考査問題提出期限を設け、考査前日に問題提出を確認するため、トラブルは減っている。 先生方の個人的ミスに対しては、その場での指導と啓発活動に励む。</p>	B	<p>新校舎に移り、答案授受の場所を新たに設定したが、概ね問題なく実施できた。 問題の取り違えなどのミスを減らすよう努めたが、いくつかのミスが発生してしまった。</p>
<p>⑥ 行事に伴う時間割変更</p> <p>消滅する授業が復活する場合にミスが発生しやすい。復活した授業担当者が不満を言うことに対しては、強く指導する。</p>	A	<p>年間を通じて問題なく実施できた。</p>
<p>⑦ 時数計算表の作成</p>	B	<p>学年ごとに算入すべき教科が異なる行事に注意したい。</p>
<p>⑧ 職員会議・行事時の教員の出欠確認</p> <p>会議等の理由無き欠席者に対して何らかの措置をとらないのなら、出欠確認は不要と思われる。</p>	A	<p>職員会議・行事の出欠確認を厳密にした。 連絡なく欠席している教員については教頭に報告した。</p>
<p>⑨ 欠勤・遅刻等の届けの確認</p> <p>欠勤・出張等について、常習的に届け出ノートに記載しない、電話連絡が遅い等の教員に対しては強く指導する。</p>	B	<p>勤怠管理システムが導入されたことで、業務形態が変化してしまった。システムに入力はしたものとの時間割係へ連絡していない教員への対応が必要になる。</p>

V 書類帳簿・教科書 係			
<p>① 教務日誌</p> <p>教務日誌は漏れのないよう万全を期す。</p>	B	<p>出欠日計表の管理がうまく進まず、各担任の意識差が目立ちました。</p>	
<p>② 掲示物 各種掲示物の整理整頓を期</p>	A	<p>特に問題はありませんでした。</p>	

す。		
③調査書・成績証明書等の発行	B	新校舎移転に際して書類管理が難しくなりました。
④各種書類の作成・発注・管理	A	特に問題ありませんでした。
⑤指導要録作成補助	B	Web での記録は達成できませんでした。
⑥教科書・副教材の採択指示・点検 教科主任と担当者での二重のチェック体制を取り、万全を期す。	A	特に問題はありませんでした。
⑦教科書・副教材の採択報告・発注・管理	A	特に問題はありませんでした。
⑦入試資料の作成	C	教務部長に一任しました。
VI庶務・内規係		
① 教室配当の決定	A	スムーズに対応できた。新校舎に入れないクラスからの不満は生じた。
② 教員配置の決定	A	スムーズに対応できた。新年度と新校舎移転の為、年に2回教員配置を行った。
③パーソナルロッカー搬入・設置・廃棄 手配 生徒のパーソナルロッカーについて、事務局に 指示する。	C	係として、特に対応する必要はなくなった。
④破損届受付及びその修理依頼	B	特に大きな破損等は生じなかった。
⑤消耗品の補充	A	マーカーの補充を頻繁に行う必要があった。今後の検討課題である。
⑥教職員に対して、内規の周知・徹底	C	特に周知をすることはなかった。
⑦特別指導実施報告書の周知	C	教務部長より周知してもらった。

⑧内規の生徒への周知・徹底	C	特に周知をすることはなかった。
VIIカリキュラム		
①保護者対象説明会にて解説	B	主に原級留置について説明した。
②新任教員へ説明	B	進級に関わる欠課時数、成績処理について説明した。
③今後のカリキュラムの検討	B	2020年度からの新カリキュラムを作成中である。
④教科単位数の点検	B	I型、II型に留意した。
VIII学校評価		
①業者(東京)との連携	A	スムーズに対応できた。
②生徒・保護者・教員アンケートの実施	A	スムーズに対応できた。設問内容には再考の余地がある。
③授業評価について	A	スムーズに対応できた。設問内容には再考の余地がある。
IX保護者会係		
①保護者会に関する事務	A	例年の保護者会行事を認識していたので、滞りなく対処できた。
②各組学級委員の募集補助・各種連絡	A	入試説明会や入試当日において新たに補助生徒を募集したが、滞りなく対処できた。
Xその他		
①インターンシップ学生受入れ手続き・運営	C	インターンシップ学生の応募が無かったため、対応しなかった。
②各種印刷物の作成・配布	A	1年間の行事の認識や、突発的な対応を迫られる印刷物にも滞りなく対処できた。ただし、今後は印刷物よりもクラッシャーでの配信が増えていくと思われる。
③芸術鑑賞会の立案・外部との交渉	A	生徒が関心を持ってくれそうなもの、実施時期など考慮し鑑賞内容を吟味した。生徒・保護者にも好評であったと思う。

2019年度 分掌名（中学教務）

評価責任者名（上田 達哉）

分掌目標	新校舎移転に伴う様々な変更を予測し、2学期以降、授業や行事、クラブ活動等、学校生活が円滑に行われるよう、各係が意識して取り組む。		
重 点 課 題	評価	成 果 と 課 題	
行事企画運営 学校行事、各学年行事の見直し、改善をはかる 新たな行事の企画	B	新校舎での行事企画は、初年度であったのでこれからの改革改善点が多く残る。	
時間割 時間割の変更・補欠の確認、考查に関する事項の確認、考查監督表の作成、問題の管理と答案の授受	A	時間割の変更・補欠の確認等スムーズな運営ができた。	
書類帳簿 教育委員会提出用書類作成、教科書類のとりまとめと発注、転学生徒用書類の作成、教務日誌の作成、指導要録の作成指導、書類帳簿備品の整備、評価・評定の記入依頼	B	必要な書類帳簿の作成・管理ができた。	
庶務 物品物・消耗品関係の点検、各教室備品関係の点検、各教室の配置、職員室の配置の検討	B	ホワイトボードの導入等新しい校舎への移転によって、物品等の管理が当初スムーズさを欠いたように思う。	
学校評価 学校評価アンケートの円滑な実施とアンケート結果の教員へのフィードバック	A	アンケートを実施し、その結果を教員にフィードバックできた。	
総合学習 各学年係と協力し、生徒自身が能動的に生き方を考えられる学習ができるよう企画する	B	より生徒が能動的に思考・行動できるような企画を考える必要があるように思う。	
中高教務の連携 今年度は新校舎移転に向けて、中高教務の連携を特に強化する	B	中高合同の職員室になったので連携がスムーズであった。	
中学校教員全体の情報共有 連絡会、中学校職員会議、掲示などで情報共有を綿密に行う。新たな情報共有の形を模索する。	B	教員研修会等の実施を企画する必要があるように思う	

入試の実施と実施に関する諸問題の検討 入試対策部と協力し、新たな入試形式の検討と対応に尽力する	B	入試対策部とスムーズに連携できた。
魅力的な公開授業見学会の企画・実施 入試対策部・広報と協力し、魅力的な公開授業見学会の企画、実施を行う	A	創意・工夫を凝らした公開授業見学会が実施できた。
円滑なプレテストの実施 入試対策部と協力して円滑な実施を目指す	B	円滑にプレテストを企画・運営できた。
新学習指導要領に伴うカリキュラムの検討 2021年度から全面実施されるなどの検討を行う。	C	教務会等で十分な検討ができなかった。

⑥生活指導

分掌名（生活指導部）

評価責任者名（福井篤）

分掌目標	生徒のためになる指導	
重 点 課 題	評価	成 果 と 課 題
<ul style="list-style-type: none"> ・生活指導マニュアルの実践 本校全職員による統一された指導の実践 	C	<p>マニュアルに統一して指導をしているが、マニュアルがあるのをあまり知らない方もおられて、全教員統一された指導はなかなか難しい。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・重点指導課題 頭髪（奇抜な形）・服装（シャツ・化粧） 遅刻（5分前行動）・携帯（校内使用） 考查規定の遵守（不正行為） 	C	<p>頭髪、服装、遅刻、携帯、不正行為等全てにおいて、前年並みである。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・生活指導部の役割の明確化 担任および学年中心の指導体制構築 生活指導部は指導の助言とサポート 	C	<p>中学は、事故が発生した際には担任、学年主任をはじめ、学年団で対応できているが、高校では生活指導部が中心となり指導している状況で変わらない。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・SNSをはじめとするトラブルへの対応 SNSに関するトラブルや問題行動への啓発活動や指導 	C	<p>TwitterやLINEに絡むトラブルや、生活指導事故は変わらない。 これからも、できるだけ啓発活動を中心に指導を続けていく必要がある。</p>

⑦入試対策

分掌名（入試対策部）

評価責任者名（北村 吉隆）

分掌目標	上宮学園中学校、上宮高等学校とも安定した生徒募集をする。	
重 点 課 題	評 価	成 果 と 課 題
①入試説明会等の日程、内容の吟味と プレゼンテーションのあり方についての研究。	B	<p>○塾対象説明会 292塾 331名参加（前年比-18塾-13名） 例年同様、実際に塾の先生方が進路指導を始める9月に時期を変更した。今後、学校での実施も視野に入れて検討していきたい。</p> <p>○プレテスト会 例年同様2回実施。一般学力型381名 適性検査型264名（前年比一般学力型+6名 適性検査型+71名）の受験があった。 例年同様、開成教育セミナー・第一ゼミナールの協力があった。 第2回の欠試者が多かった。申込期間の再考が必要ではないかと考える。</p> <p>○中学校入試説明会 例年同様3回実施317組（前年比+59組）の参加があった。第2回参加者が55組と少なく日程再考が必要ではないかと考える。</p> <p>○公開授業見学会 今年度は2回実施。179組（前年比-60組 前年は3回実施）の参加があった。例年3回実施しているが、日程の関係で2回実施となつたため参加者が減少したものと考える。</p> <p>○高校入試説明会 4回実施。2788組（前年比+214組）の参加があった。第2回の参加者が少なく、第4回の参加者が多すぎるため日程の再考が必要ではないかと考える。 誘導・資料配布等に生徒を活用した。参加者からは好評を得た。</p> <p>○その他外部説明会 ・外部説明会74回（中学校受験希望者181組・高等学校受験希望2131組） ・塾・中学校主催見学会7回 ・合同説明会（塾主催11回 中学校主催10回） 参加している。</p>

<p>②新しいタイプの入試方法を検討する。 (資格取得者の点数化あるいは優遇措置も含む)</p>	B	<p>今年度より、初日午後入試(一次一般学力型入試 B)を採用。初日午前入試(一次一般学力型入試 A)の受験者を昨年より 9 名減らしたが、97 名の受験があり、13 名の入学があった。</p> <p>昨年度より、自己アピール型入試を実施している。エントリー会の参加者が 1 名で、受験生が 1 名で実施された。今後、さらに検定試験等実施の団体への広報を強化したい。</p> <p>一昨年度から実施している適性検査型入試での入学者が 3 名であった。受験生が 13 名と昨年の 16 名、一昨年の 48 名から激減している。受験生を増加させる方法を検討したい。</p> <p>今後、中学校、高校ともに資格取得者（英検、漢検、数検等）の点数化あるいは優遇措置を検討したい。</p> <p>今後さらに、新たな入試方法（スマホ入試・プログラミング入試・プレゼンテーション入試・英語入試・インターラクティブ入試など）の検討が必要ではないかと考える。</p>
<p>③塾・中学校（海外日本人学校も含む）訪問を中心としたより効果的なアプローチの検討。</p>	B	<p>色々な、場面・場所での広報活動を実施した。今後さらに広げたい。</p>
<p>④中学入試の日程及び広報等に関する提案。 (教科型・適性検査型・自己アピール型)</p>	B	<p>今年度より、初日午後入試(一次一般学力型入試 B)を採用。13 名の入学があった。できるだけ早いタイミングの入試日程が、中学入試の原則だが、二次入試を午後に実施することも考えてみてはどうだろうか？</p>
<p>⑤部署内の情報の共有化を図る。</p>	B	<p>昨年度同様ホワイトボードに、新しい情報を掲示し、出来るだけタイムリーに共有できるようにした。情報量が多くうまく共有できない場面もあった。</p>
<p>⑥上宮太子入試対策部との必要な情報の共有化を図る。</p>	B	<p>1回ではあるが情報交換会を実施。また、塾対象説明会・中学校フェアでは上宮太子入試対策部長の応援もあった。</p>
<p>①入試説明会等の日程、内容の吟味とプレゼンテーションのあり方についての研究。</p>	B	<p>○塾対象説明会 292 塾 331 名参加（前年比 -18 塾 -13 名） 例年同様、実際に塾の先生方が進路指導を始める 9 月に時期を変更した。今後、学校での実施も視野に入れて検討していきたい。</p> <p>○プレテスト会 例年同様 2 回実施。一般学力型 381 名 適性検査型 264 名（前年比一般学力型 +6 名 適性検</p>

	<p>査型+71名)の受験があった。</p> <p>例年同様、開成教育セミナー・第一ゼミナールの協力があった。</p> <p>第2回の欠試者が多かった。申込期間の再考が必要ではないかと考える。</p> <p>○中学校入試説明会</p> <p>例年同様3回実施317組(前年比+59組)の参加があった。第2回参加者が55組と少なく日程再考が必要ではないかと考える。</p> <p>○公開授業見学会</p> <p>今年度は2回実施。179組(前年比-60組 前年は3回実施)の参加があった。例年3回実施しているが、日程の関係で2回実施となつたため参加者が減少したものと考える。</p> <p>○高校入試説明会</p> <p>4回実施。2788組(前年比+214組)の参加があった。第2回の参加者が少なく、第4回の参加者が多すぎるため日程の再考が必要ではないかと考える。</p> <p>誘導・資料配布等に生徒を活用した。参加者からは好評を得た。</p> <p>○その他外部説明会</p> <ul style="list-style-type: none"> ・外部説明会 74回(中学校受験希望者181組・高等学校受験希望2131組) ・塾・中学校主催見学会 7回 ・合同説明会(塾主催11回 中学校主催10回) <p>参加している。</p>	
②新しいタイプの入試方法を検討する。 (資格取得者の点数化あるいは優遇措置も含む)	B	<p>今年度より、初日午後入試(一次一般学力型入試B)を採用。初日午前入試(一次一般学力型入試A)の受験者を昨年より9名減らしたが、97名の受験があり、13名の入学があった。</p> <p>昨年度より、自己アピール型入試を実施している。エントリー会の参加者が1名で、受験生が1名で実施された。今後、さらに検定試験等実施の団体への広報を強化したい。</p> <p>一昨年度から実施している適性検査型入試での入学者が3名であった。受験生が13名と昨年の16名、一昨年の48名から激減している。受験生を増加させる方法を検討したい。</p> <p>今後、中学校、高校ともに資格取得者(英検、漢検、数検等)の点数化あるいは優遇措置を検討したい。</p>

		今後さらに、新たな入試方法（スマホ入試・プログラミング入試・プレゼンテーション入試・英語入試・インタラクティブ入試など）の検討が必要ではないかと考える。
③塾・中学校（海外日本人学校も含む）訪問を中心としたより効果的なアプローチの検討。	B	色々な、場面・場所での広報活動を実施した。今後さらに広げたい。
④中学入試の日程及び広報等に関する提案。 (教科型・適性検査型・自己アピール型)	B	今年度より、初日午後入試(一次一般学力型入試 B)を採用。13名の入学があった。できるだけ早いタイミングの入試日程が、中学入試の原則だが、二次入試を午後に実施することも考えてみてはどうだろうか？

⑧保健管理

分掌名（保健管理 2019年度）

評価責任者名（蟹山 喜代美）

分掌目標	生徒の心身の健康を保持増進させ、問題を抱えこまない環境づくり		
	重 点 課 題	評 価	成 果 と 課 題
1. 生徒の定期・臨時の健康診断の計画及び実施	B	各分掌と連携をとり、スムーズに実施することができた。 さらに円滑に実施できるよう検討を重ねる。	
2. 既往症について、配慮を要する生徒の把握及び対応の確認	B	既往症からの配慮は多岐にわたり、保護者との対応もさらなる慎重さが必要になった。今後も丁寧に対応する。	
3. 学校管理下における救急処置の実施	B	学校管理下における疾病・障害の救急処置は的確・迅速さが求められるので、研修を重ね、ミスのないよう対応する。	
4. 性教育及び思春期教室の計画及び実施	B	高校1年対象の講演会を、8月29日に実施した。該当学年団と連携をとり、講演内容が生徒の心に残ったことを期待する	
5. 宿泊を伴う学校行事における生徒への事前指導、関係機関への連絡、配慮を要する生徒への確認及び引率	B	宿泊行事において、アレルギー対策は必須で、旅行会社との綿密な打ち合わせを行っている。	
6. AEDの管理（点検・備品購入）	B	以前購入した福田光電の器械の使用期限が切れたので、アルソックにレンタルし、今後の定期的な点検も依頼した。職員対象に新しい器械の説明会を実施した。	
7. 健康相談、ヘルスケアシステムの充実	B	学校心療内科医及び産業医など、専門家のアドバイスももらいながら、ヘルスケアシステムを構築していきたい。	
8. 独立行政法人日本スポーツ振興センター災害共済給付金の請求と生徒への支払い事務手続き	A	生徒へ還元した給付金は、中学・高校で4,072,586円である。今後も漏れるとのないよう適切に手続きを行う。	

⑨教育相談

分掌名（教育相談 2019年度）

評価責任者名（伊藤 隆）

分掌目標	個々人のスキルアップ及び支援体制の確立を目指す。	
重 点 課 題	評 価	成 果 と 課 題
①相談業務 ・生徒・保護者へのカウンセリング ・教員へのコンサルテーション ・メールによる関係づくり ・学校への不適応を呈している生徒の把握 (案) →欠席日数のチェック	A	○カウンセリングやコンサルテーションするに当たって、更なる研修・研究を必要とし、それらを実施していく方向である。 ○不登校状態を呈している生徒の把握(案)に関しては、担任・教務との連携をさらに考え、実施していく方向である。
②学校に行きづらい子どもの「親の集い」	A	○保護者の心理的安定に伴い、保護者の子どもを支援するスキルの獲得が進んでいる。不登校経験者の参加により、保護者の子ども理解が進んでいる。今年度は日程が取れず例年間 12 回のところ 8 回しか実施できなかつた。
③発達の偏りを持つ子どもの「親の会」(通称: ホップの会)	A	○保護者同士の交流が深まり、子どもを支援するための情報交換が進んでいる。当事者の参加により、保護者の子ども理解が進んでいる。また学習支援や社会的支援を専門にされている方にも参加いただき非常に有意義な時間を持てた。
④保護者・教職員のための勉強会	A	○外部講師から青少年の自立をテーマに研修を実施し、概ね好評であった。行事が多く、教職員の参加が少ないのは残念である。今年度は LGBT をテーマに講演をしていただき、いろいろな性があることを学べる機会を得たことは私たち教員にとって有意義であった。
⑤教育相談係 HP の活用	B	○HP が開設され、現在のところ相談申込時に利用されているが、今後は活動実施内容や広報を中心に掲載したい。
⑥広報 ・ 教職員向け…カンファレンス、「親の集い」、「親の勉強会」「保護者・教職員のための勉強会」といった係活動の認知 ・ 保護者向け…「親の集い」、「親の勉強会」「保護者・教職員のための勉強会」といった係活動の認知 ・ 生徒向け…オリエンテーション時における係活動の認知	A	○教職員向けは職員会議での連絡、保護者向けでは紙媒体だけでなくメール配信により広報ができた。

<ul style="list-style-type: none"> 外部向け(案)…「保護者・教職員のための勉強会」の案内を塾を介して上宮に関心のある保護者への伝達及び近隣の公立小・中学校を介して保護者への伝達 	A	<p>○外部向けの「保護者・教職員のための勉強会」の広報は、入試対策部と連携し、近隣の中学校に通う保護者へ行った。その結果、今年度は1校の学校からの保護者が参加された。今後、小学校にも広報の範囲を広げたい。</p>
⑦外部機関（医療、外部相談所など）との連携	A	<p>○面接で医療が必要と思われた方々を連携する医療機関につなげることができた。またDrからの指示を仰ぎ、学校生活での適応を図った。</p>
⑧保護者会との連携 <ul style="list-style-type: none"> 保護者のニーズに応えられる講演テーマであれば「保護者・教職員のための勉強会」での連携が可能 	B	<p>○今年度は保護者会の協力を得て保護者会の一部の方の参加があった。</p>
⑨保健管理部門との連携 <ul style="list-style-type: none"> 事例の共有化 学校精神保健への協働 	B	<p>○保健室から2人、係に配属され事例の共有化が進んでいる。今後、さらに学校精神保健の充実に努めたい。</p>
⑩学年会との連携 <ul style="list-style-type: none"> 情報の収集 不登校や発達の偏りのある生徒の担当者会議の実施 支援シートの作成 	A	<p>○不登校や発達の偏りのある生徒を持つ担任との連携は進んでいる。また学年団と連携をし、担当者会議の実施も進んでいる。 ○今年度は22名の支援シートの作成を行った。今後は人権とともに作成に取り掛かりたい。</p>
⑪「不登校を考える会」会報の配布	A	<p>○配布する他、配布した際、教職員から生徒・保護者に関する種々の情報を入手でき、活動に役立てることができた。</p>

分掌名（特別支援教育コーディネーター 2018 年度） 評価責任者名（伊藤 隆）

分掌目標	学校内外の連絡を調整し生徒・保護者のみならず教職員へのより良い支援を考える		
	重 点 課 題	評価	成 果 と 課 題
・支援が必要な生徒の調査 入学時に提出される「保健管理票」の確認 担任からの情報 保護者からの情報	A	「保健調査票」をもとに支援の必要と思われる生徒をピックアップし、場合によっては保護者から事情を聴取することができた。	
・支援シートの作成及び作成後の教科担当者 及び保護者へのフィードバック	A	今年度は 22 名の支援シートを作成に当たった。それ以外にも気になる生徒も見受けられるが現状では精いっぱいの状態である。	
・外部との連携	A	精神科医や心療内科医に生徒を紹介し、学校が配慮しなくてはならない事柄をDrからアドバイスを受けることができた。	
・特別支援に関する研修	B	係の者が外部へ研修に行く機会があまりとれなかった。また学内での教員研修は今年度、実施することができなかつた。	

⑩データ処理

分掌名（データ処理室）

評価責任者名（西脇圭二）

分掌目標	データ処理業務の遂行 入力システムの安定を処理速度の向上 学校業務効率化のためのプログラム開発	
	重 点 課 題	評価
入力システム、調査書発行システム等のプログラムを更新して使いやすさの向上を目指す	A	問題なく全教員に使ってもらうことができた。
入試業務の遂行 (昨年の web 入試処理の問題点を改善する)	A	問題なく入試業務を終えた。
プレテスト、公開授業、入試説明会の web 申込み作成 (事前の準備シミュレーションを念入りにする)	C	事務所へ移行
通知表を含む考查データ等の担任への配布	A	問題なく配布できた。
新元号に伴うシステムのプログラム変更	A	これまでプログラムは和暦で動いていたが、西暦で動くようにプログラムを変更し、出力はこれまで通り和暦で出力できるようにプログラムを作成。

⑪生徒会

分掌名（生徒会） 評価責任者名（堀田 泰彦）

分掌目標	学校行事・生徒会業務の内容と効率の見直し。 教員間の連携がさらに取れるようにする。	
重 点 課 題	評 価	成 果 と 課 題
生徒会予算の使用法の検討	B	クラブ予算については、新年度すぐに支給できるようになった。文化祭に予算については、備品のレンタルが少なかったため、減らすことができた。
クラブ活動についての問題点の洗い出し	B	運動部の活動場所の確保が難しかったが、各顧問先生方の協力のもと活動ができた。文化部についても新校舎になり、場所の確保が難しかった。
体育大会の運営の体系化	B	種目と運営方法を見直すことが出来た。次年度へ向けての取り組みを進める事が出来た。さらに円滑に、安全に実施していきたい。
文化祭の運営の体系化	B	F A Qの作成配布により例年通よりは、担任教諭の規範統一が出来た。さらに内容を吟味し生徒も含め、意識を高めていきたい。
その他生徒会管轄の業務・行事の見直し	B	クラブ予算の早期給付ができるようになった。体育大会の要項・文化祭の要項を生徒会で作ることになった。体系化できるように考えていきたい。

⑫人権教育

分掌名（人権教育）

評価責任者名（井上真佐理）

分掌目標 「互いに尊重する共生社会のあり方を考える」		
重 点 課 題	評 価	成 果 と 課 題
中学校1年人権教育LHRについて	B	参加型学習を取り入れることにより、相手のこと、周りのことを考えながら尊重する態度を養うことができた。緊急の問題が起った場合、テーマに固執せず、弾力的な実施が必要。
中学校2年人権教育LHRについて	B	気づきや思いやりを通じて、より障がい者や在日外国人など、周りの人たちとどのように接し、実行することができるかが今後の課題。
中学校3年人権教育LHRについて	B	中学3年間にわたり、人権を学んできたが、自分らしく、自分にも「やればできる」という前向きな意欲を持たせることができるかが今後の課題。
高校1年人権教育LHRについて	B	「高齢者問題」の題材を教材によって生徒全員に将来の高齢化社会、実施する老人福祉体験への事前学習となった。「いじめ(DVD)教材」は、生徒にいじめがいかに人権を壊すものであるかを理解させることができたと思う。来年度人権課題への教材の厳選が必要。
高校2年人権教育LHRについて	B	新しい教材の「部落の歴史(DVD)」、「在日外国人問題」、「現代の様々な人権課題」を学習した。知らなかつた正しい知識を積極的に学習しようとする生徒の姿勢も見られた。
高校3年人権教育LHRについて	B	「情報化社会問題」、「自己復元力の保持」の社会に出て常に接点のあるテーマであるを選んだ。生徒の興味深く見られたという感想があった。
中学1～3年 各学期「いじめ・家庭アンケート」について（従来通りのマークシート・記述用紙による生徒回答）	A	私学人権義務部会に所属している学校は、年2回前後必ず実施されている。本校は、各学期ごと3回実施(3学期はできず)。来年度以降も継続的に実施し、いじめの早期発見・解決につなげるものとして生徒に浸透させていきたい。
高校1～3年 各学期「学校・家庭・生活アンケート」について（高3は従来通り。高2・3は、2学期より、クラッシャーによる生徒回答）	A～B	同上。ただし、始めたクラッシャーによる回答を全生徒が実行するような、方策、指導、そして担任理解・協力が得られるように、検討工夫を続けることが必要。
年1回の人権教育教職員研修について（12月） (講師:近藤由香さん NPO法人QWR C理事) (内容:LGBTへの理解)	A	性の多様性には決まったものではなく、全教員の一致の認識の元、性の多様性を生徒に理解させる実践例がわかりやすく、学ぶべき多くの事を気づかされた。

⑬図書・視聴覚教育

分掌名（図書館）

評価責任者名（村田侑右）2019年度

分掌目標	2019年度の図書館の分掌目標の第1は蔵書の増加にある。第2に新図書館でのトラブルをこの1年で発見していく。第3は図書館のマナーの普及と機器の充実をめざす。	
重点課題	評価	成果と課題
昨年度以上の貸出冊数をめざす。中高合わせて7000冊をめざしたい。	A	7000冊には及ばなかったが、昨年度2092冊から今年度5317冊まで増えた。
新図書館でのトラブルをこの1年で発見していく。	B	授業スペースの中で高校3年生と中学3年生が同時に行われる時間があり、「騒がしそう」と高校3年の担当教員からの報告を受けている。
古く、近年貸し出しがされていない蔵書は極力減らしていく。	A	図書館引っ越しに伴って貸し出しがされていないかなりの蔵書を各教科の先生方のご協力で減らすことができた。
図書を閲覧しやすいような配置を考え、さらに快適な空間にしていく。	A	新図書館になり、この点においては最重要ポイントとして検討してきた。
アクティブラーニングスペースを有効活用してもらい、有意義なスペースにしていく。	A	ほぼ毎時間アクティブラーニングスペースの利用があり有意義に活用できた。
図書だけでなく、偉業を成し遂げられているOBの方の紹介を積極的にしていく。	A	特別スペースにて紹介してきた。
放課後の図書館の使用方法を今後見直していく。	A	新校舎になってまだ間もないで来年度の課題として取り組んでいきたい。
紀伊国屋書店との連携を取り、図書館運営を生徒にとって有意なものにしていく。	A	連携を密にとることでトラブルなく1年間を終えた。

⑭広報戦略

分掌名（広報戦略係）

評価責任者名（相本 秀彦）

分掌目標	上宮ブランドを構築し、幅広いフィールドでの広報企画を立案する。	
重 点 課 題	評 価	成 果 と 課 題
① AR等を利用した「学校案内」(ポスターを含む)等の作成	B	ループリックや経路案内等においてARを利用したパンフレットが作成できた。内容においてはさらに検討していくなければならない。
② web広告を展開し、フェイスブック、インスタグラムを使った広報の立案	B	グーグル検索において、上宮の掲載順位を上げたり、ジオターゲティングやリターゲティングにおいて、上宮の広告を広く配信できた。
③ 公開授業見学会・プレテスト会の案内チラシについての研究	B	斬新なデザインのチラシができた。公開授業見学会の内容について、もう少しわかりやすく提示する必要があるかもしれない。
④ フェイスブックやインスタグラムなどのデジタル広報を企画する	C	H P中のフェイスブックやインスタグラム等を用いての広告展開はほとんどできなかった。
⑤ 新しい広報ツールについて考える	B	G Sベアについては検討中。入学希望者のみならず、在校生の満足度を高まるよう保護者会との連携を含めて進めていきたい。
⑥上宮ブランドの構築。	B	上宮ブランドの形はできつつあると思う。今後130周年記念事業についてさらにその形を明確にしていきたい

⑯ I D

分掌名（ I D係 ） 評価責任者名（ 山本 直樹 ）

分掌目標	I C T 教材の作成と A L 実施に向けての情報収集と実践を行う 教員間での情報の共有を行う	
重 点 課 題	評価	成 果 と 課 題
I C T 授業を実施する際のハード面での情報収集を行う。	A	<p>2022 年度（もしくは 2023 年度）にデジタル教科書に対応できるように生徒一人ひとりにアップルペンが使用できる第 6 世代以降の iPad を持たせる。それに合わせ、ロイロノート等を導入して ICT 教育を行うために教員には iPadPro を貸与する。</p> <p>その準備として 2020 年度に一部の教員にアップルペンと iPadPro を貸与し研究・実践を行う。</p> <p>ということを会議の中で決定し殿井副校長に具申した。</p>
I C T 教材の作成についての情報収集と実践を行う。	A	各自で実践している。
I C T 教材への簡単な移行の可能性を探る。	A	新校舎移転に伴い導入されたプロジェクトとみらいスクールにより従来のデジタル教材として用いていた Word 、 powerpoint での教材、図、表頭をプロジェクトする環境は整えられた。
A L 実施に向けて実践研究を行う。	C	FindActivelearner を紹介しているのみにとどまっている。
I C T 教材の作成等の情報の教員間での共有を行う。	B	各教科で研究会を開いてもらっている。
A L の手法等の情報の教員間での共有を行う。	C	FindActivelearner を紹介しているのみにとどまっている。
外部の研修や勉強会に積極的に参加する。	A	各自で参加している。
多くの先生方が I C T 機器を用いて授業が行えるように I C T 機器の整備を行う。	A	電子黒板機能の不備等を確認し適宜調整等を行っている。

IV 総 括

上宮学園中学校・上宮高等学校

校長 山縣真平

学校経営の基本方針	具体的方策
<p>本校はこの冊子の冒頭にある「上宮学園中学 校・上宮高等学校の教育理念」に基づき、明治 23 年以来、129 年間にわたりその長い歴史を刻んで きた。</p> <p>2019 年 8 月、第二学期開始と共に新校舎を中 心に南キャンパスの運用を開始し、学校環境は一 変するが、校祖法然上人の仏教思想を基盤とした 「建学の精神」と「教育目標」は不易である。</p> <p>現在進行中の教育改革に対応しつつ、世界史的 に見て、稀に見る地球規模での自然環境・政治・ 経済の激変期をも乗り切れる人材育成をめざし て新たな全人教育に取り組む方針である。</p>	<p>南キャンパスの完成とともに、その運用方法を 構築しながら、学校の教育理念に基づき、各分掌・ 組織が過去のルーティンワークにこだわることな く有機的に結びつき機能することをめざしたい。 そのためには分掌・組織が「建学の精神」と「教 育目標」をよく理解した上で、自らの現状を把握・ 認識して、自ら評価を下し、その反省の上に新た な課題と目標の設定を行うことなる。</p> <p>全日制普通科の本校は、その制約上毎年度ごと に分掌・組織の大きな人事異動がおこなわれ、よ い意味での新年度からのリセット可能である。こ の作業内容を外部に公表し、保護者や地域の人々 に、生徒の成長と教職員の努力等を理解して頂き、 学校への信頼を確かなものにしたいと考えてい る。</p>

総括（成果と課題）

2019年度は学校評価取り組みに関して、上宮太子中学校との統合による上宮学園中学校とGコースへの移行2年目となった。一昨年度実施した中学校の教室を7号館へ集約、各教室へのプロジェクターを設置等により、教学の充実とICT化を推進した。また、アクティブラーニング社との提携によりアクティブラーニングの教員研修を推進した。

学校の教育理念に基づく各分掌・組織の目標設定が検討・企画され、実施の方向へと進んだ。また、創立130周年記念行事の一環として、南グラウンドに新校舎を建築し学習環境中心の南キャンパス、1・2・3・5号館を取り壊して、グラウンドを整備し、総合体育館と共にスポーツ中心の北キャンパスにという整備計画を策定し、8月第二学期開始と共に南キャンパスの新校舎の運用を開始した。

工事により体育授業・クラブ活動の教育活動への影響を考慮し、授業内容の変更、校外における部活動場所と移動手段の確保をおこなった。

中学校においては、英語教育に関して、英語科授業のネイティブ導入が4年目を迎え、その成果を問う意味も踏まえて、中学3年生実施の修学旅行を、シンガポールでのホームステイを中心とした海外修学旅行とした。英語教育のみならずグローバル教育への展開も含めて、その成果を短長期的に客観的に評価するための取り組みも将来の高大接続を視野に入れながら検討していく必要がある。

3月より新型コロナウイルス感染症により休校を余儀なくされたが、中高とも卒業式を挙行できたことは不幸中の幸いであった。

新型コロナウイルス感染症による学校教育への影響を最小限にとどめ、次年度に完成する南北の両キャンパスを活用した新しい教育を模索してまいりたい。